

日本精神文化の根底にあるもの（十一）

—「神道の生死観」について—

What lies in the Depth of Japanese Mentality

—Life and Death in Shinto—

渡 辺 勝 義

Katsuyoshi Watanabe

長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要

10巻1号

Bulletin of Faculty of Contemporary Social Studies

Nagasaki Wesleyan University

2012年3月

* 日本精神文化の根底にあるもの (十二)

—「神道の生死観」について—

*** 渡辺 勝義

キーワード… 神道 日本神話 生死観 契沖 安心なき安心 本居宣長

在原業平 徳 長たるものの覚悟 甲陽軍艦 脇差心 碧巖
録 召命 死者は生きている 金光大神 生きる用意をせよ

一、はじめに

戦後、日本人は自民族の誇りや自信を全く喪失してしまい、その大きな穴を埋め合わせるかのようにアメリカ型個人主義や物質主義、西洋の経済効率第一主義、科学合理主義、民主主義などをこの上ないものとして無批判に受け入れるようになり、折からの高度経済成長や都市化現象と相俟って、今や従来の「家」観念や土地神を中心とした地域共同体の連帯の絆は無残に断ち切られてしまい、恰もGHQの占領政策が見事に成功したかの如き感がある。

昨年三月に起こった原発事故に関する政府や電力会社の後手後手の対応ぶりや、誰一人責任を取ろうともしないその無責任体質振りを見てみると、日本人としての矜持を失い果ててしまった感があり、誰もが「日本人はすっかり変わってしまったナ」との想いを強くしているのではないだろうか。彼ら為政者や長と名のつく者達にあるのは帝王学どころか処世術のみであり、長たるものの資質がまったく欠けているのではないかと思われるのである。最近、テレビニュースやインターネット等を通して国内外のかつて無かったような悲惨な状況がリアルタイムでお茶の間に飛び込んでくるのを見るにつけ、誰もがこの国は、この世界は一体どうなってしまったのか、

これから大丈夫なのだろうかと悲歎に暮れる出来ごとが地球上に多発している。今やどこからどうして手をつけたらよいのか有効な解決策さえ見出し得ず、此の国はまったく取り返しつかない、歯止めの効かないアノミー状況下にあるといっても過言ではないように思える。

昔は日本魂というべきか、昇る朝日に柏手を打ったり、「神みそなわす」「お天道様が見てござる」「良心に恥じない」生き方などと言われたように、人々の心の内には日本人独特の倫理観や道徳心、日々の生き方に対する強い信念があったが、今では私たちの生命の源である大自然と共にある生き方、それらを神と称え畏敬し感謝する心や祖先崇拜の念を失い果ててしまった。結局は気が付けば、眼前には無残なばかりの荒涼たる風景が広がり、元の通りに穢い清めることさえも出来ないほどに故郷の緑なす山々、鎮守の杜、山女魚の泳ぐ清流や幸豊かな美しい海、先祖伝来の土地や田畑は今や放射能ですっかり汚染されてしまった。人は神によつて生かされ生きる此の身であつた筈なのだが、神と人との密接なつながりはもはや薄れ果て、「道を修め徳を積む」などといったそれまで大切にしていた筈の日本精神や徳目はどこへやら、どこもかしこも無責任で卑しい、浅ましい人間ばかりになつてしまった感がある。

こうした国家の非常時に際して、改めて先人が大切に守り通して来た古典を紐解き、日本人の生死観について深く省みる時を持つということは、私たちがこれからをどう生きるかを考えるよすがともなると思うのである。

今日、亡き親・先祖等いわゆる「死者の御霊」たちの往く末やそ

* Received February 4, 2012

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 経済政策学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

の状況を推し量ることよりも、愛する者を失い、遺された者たちのその喪失感や深い悲しみをどう癒すかといった、グリーフ・ケアが盛んに取り沙汰される傾向にある。人はどう生きるべきなのか、どう死んだら良いのか、死にゆく者にどう対処したら良いのかといった、この生と死にまつわる問題は誰にとつても避け難く、古くて新しい問いなのであるが、この問題について神道神学の（故）上田賢治先生は、

生死観、或は死生観の問題は、組織神学の基本問題である「神」・人間、そして「存在世界」についての理解が先行して、はじめて正しく全体的に説きうる課題である。（1）

とし、また、

神道の生死観を問う場合、我々は必ず、日本神話にその指針の原形を見出す努力を要求されている。（2）

と述べられた。上田先生は仏教者が説く大往生について見据えつつ、神道の生死観について、本居宣長の説を引き合いに出して次のように述べられている。

国学の大成者・神道神学者として知られた本居宣長は、人の心が元々しどけなく女々しいもので、そうした心こそ偽りのない「まこと」の心であり、それが文学の本質「ものゝあはれ」に他ならないという理解から、在原業平の臨終歌を問題にし、悟り顔に死を平然と受け止めようとする仏僧の態度を批判した契沖の歌評に触れ、彼こそ「法師なれども大和心なる人なり」と賞揚している。（3）

と述べ、

宣長のこのような見解が、「記」に伝えられた岐神の態度に基礎を置くものであることは疑いえない。（4）

として、

これを良しとすれば、逝く者と送る者との違いこそあれ、神道では、いわゆる大往生を殊更賛美し、或は願う心はない、としなければならぬ。死はたとえそれがどのような姿で訪れようと、神道的には、畏きものの以外の何ものでもないといつて間違いないように思われる。

（5）

と述べておられる。つまり、神道においては生も死も神の御心の範疇に属

する畏きものの、神秘に属する事柄なのであり、仏者が説くが如き「大往生」（6）などは望んでもいかなかったというのである。

本居宣長の生死観（安心なき安心）については別項にて述べるであろう。筆者はこれまで「神道」（7）をキーワードとして「日本精神文化の根底にあるもの」というテーマを掲げて日本とは何か、真に日本的なるものとは何か、また神道の本質について考察し続けて来たが、今回は神道の生死観というテーマで、神道學を専攻した大学院時代の恩師である上田賢治先生の研究成果を基にして、日本人の生死観について些か考えてみたいのである。

先にも述べたことだが、生まれては死に至ることは何人も避けることの出来ない厳たる事実であり、人間とは何か、人間如何に生きるべきかという問いは古くて永遠に新しい問いかけであり、実存の中核をなす問題でもある。生と死とはその理を一にし、切つても切れない不可分のものであるからには、結局、人間とは何か、人間如何に生きるべきかについて古典神話や先人たちの生死観についてふれながら、自己の見解を吐露するということになるであろう。牟田耕蔵氏が住之江大神より賜うた神教の中に次のような御神歌があるが、あるいは本論の参考となるやも知れぬ。

- ・ 生きむこと死なむことども考えな生死はともに神の手にあり
- ・ 此の世とも又あの世とも云ふなれど皆共にこそここに在るなり
- ・ かくり世も今の世も共に同じもの別にへだてのあるべきもなし
- ・ かくり世のみたまも此の世の現人も神の手にこそ抱かれてあり（8）

二、古典神話に見る生と死

先述の如く、日本人の乃至神道の生死観について語ろうとする時に日本神話に基づくべきであると説いたのは上田賢治先生であった。

日本神話は、我が国固有の民族信仰である神道にとつて、神典としての性格を保持している。それは神話が、文字通り神々についての信仰伝承であるが故に、そこにこの神話を伝承した者たちの「存在」理解、その本質と在るべき姿とについての認識が、意図的であると無いとの如何に関わらず、示されていると考えられるからである。この意味で

は、神道の生死観を問う場合、我々は必ず、日本神話にその指針の原形を見出す努力を要求されている。(9)

この項では上田賢治先生の「日本神話に見る生と死」(10)という論考に従い、記紀などの古典神話において人間の生と死がどのように語られているかについて見てみたい。

「人間の在り方は、或はその在るべき姿の発想基準は、人間がいかにして誕生したかの理解によつて、ほぼ決定される」(11)というが、ヘブライの創世記神話と異なり、日本神話では人間が如何にして誕生したかについて格別に語つてはいない。この両者の違いについて上田先生は、

創世記が万物の創造主なる神を発想し、他方日本神話が「存在」を所与として、その本質顕現の形で神を発想していることに基づくのは明らかである。日本神話は天地の開闢を語っているのであり、決して創造を発想しているのではない。この分別の無さが、神道の神学を歴史的に混乱させ、誤りを起こさせた根本原因である事を忘れてはならない。(12)

と述べておられる。

さて、日本神話の中で人間について表記した箇所を捜してみると、まず、伊邪那岐命の黄泉の国訪問譚に、「我をな視ましそ」との誓いを破つて伊邪那岐命が一つ火をともして伊邪那美命の死体を視た時、その体はすでに腐敗しており、蛆が集り、八柱の雷神が化成していた。これを見た伊邪那岐命は驚いて見畏みて逃げ還ろうとする。伊邪那美命は「視るな」の禁忌を犯した伊邪那岐命の所業に「吾に辱見せつ」と怒り、豫母都志許賣や黄泉軍をして追わしめた。逃げる途中、黄泉比良坂の坂本に到りし時、桃子三箇を取り投げて追手を撃退した伊邪那岐命はその桃子に對して

「汝、吾を助けしが如く、葦原中国に有らゆる宇都志伎青人草の、苦しき瀬に落ちて患ひ惚む時、助くべし。」と告りて、名を賜ひて意富加牟豆美命と號ひき。(13)

と命じたが、ここに見られる古語の「青人草」とは人間のことである。また、黄泉比良坂で千引の石を引き塞えて、その石を中に置きて、二神が各々對い立ちて事戸を度すという場面があり、

伊邪那美命言ひしく「愛しき我が那勢命、此如為ば、汝の国の人草、

一日に千頭絞殺さむ。」といひき。爾に伊邪那岐命詔りたまひしく、「愛しき我が那邇妹命、汝然為ば、吾一日に千五百の産屋立てむ」とのりたまひき。是を以ちて一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生まらるなり。(14)

この条に見られる「人草」もやはり人間のことである。

『日本書紀』の素戔鳴尊生誕の段に此の神の神性について、此の神、勇悍くして安忍なること有り。且常に哭き泣つるを以て行とす。故、國內の人民をして、多以て夭折なしむ。(15)とあり、此処には明らかに「人民」の文字で人間の存在について触れている。

また、『古事記』須佐之男命の大蛇退治の段には、

出雲国の肥の河上、名は鳥髪といふ地に降りたまひき。此の時、箸其の河より流れ下りき。是に須佐之男命、人其の河上に有りと以為ほして、尋ね覓めて上り往きたまへば、老夫と老女二人在りて、童女の中に置きて泣けり。(16)

とあつて、ここにはハッキリと「人」と表記されている。

以上に見た如く、記紀神話においては人間の起源やその始原について明確に且つ直裁に語つた所はなく、人間の存在について知るための資料とはいへば、いずれも伊邪那岐命・伊邪那美命二神の國生み神話の後にある。つまり人間は岐美二神の國生みに際して國土と共に祖神の子として生れていたのである。大和言葉の「國」はただ単に物質としての國土でもなく、また、ステイツの翻譯語としての国家とは異なり、人を含めた共同体を意味しているのであり、私たちの祖先は自らが神に生み出された「神の生みの子」であると認識していたということなのである。記紀には各部族がその祖を神話に登場する神々に求めており、また平安期に編纂された『新撰姓氏録』には大きく神別・皇別・蕃別と分けてはいるものの、その祖をいずれも神話の神に繋げており、そこに神と人との密接な関係性が見られる。神と人とは親子の關係、即ち血縁の關係にあり、人は神によつて生み出され、生かされ生きる存在なのである。上田先生は、

神と人との血縁によるつながりの信仰、これが日本人の「生」に対する態度を方向づける上で、どれほど大きな意味を持っているかを忘れ

ることは出来ない。(17)

と述べておられる。「天地神明に誓つて……」とか「吾、常に神と共にあり」、「お天道様が見て御座る」などといった強い信念、日本人の誇りや自信も、すべては「神と共にある」ということの喜びの自ずからなる発露というべきである。神なくして誇りも何もあつたものではない。

では「死」の起源については神話にはどう記されているだろうか。すでに引用して見てきた箇所だが、再度、見てみよう。

愛しき我が那勢命、此如為ば、汝の国の人草、一日に千頭絞殺さむ。」といひき。

爾に伊邪那岐命詔りたまひしく、「愛しき我が那邇妹命、汝然為ば、吾一日に千五百の産屋立てむ」とのりたまひき。是を以ちて一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人生まるるなり。(18)

とある記紀の神話伝承を考慮すると、

人間界における人の誕生と死とは、共に國生みの祖神・岐美二神の神事に発しているというのが、その信仰的理解であり、古代人の生の決断だったと言いえよう。(19)

と上田先生は述べておられる。つまり、

死は、國生みの祖神の怒り、嫉みに起源してゐるのである。それは、神から與へられた所與としての恐れである、とする思念と同時に、死者と生者との絶ち切れぬ想ひがこめられてゐる伝承だと見ることが出来るまいであらうか。(20)

と上田先生は説かれるのである。また、伊邪那岐命・伊邪那美命二神のこの神話は次のようにも解することが出来る。

岐美二神が天つ神から委託された生成化育の神業は、たとえば「生者」の世界のみでなく「死者」の世界も含めての謂であり、この世界は一方で絶えず「生命の誕生」があれば、もう一方で絶えず「生命あるものの死滅」があるのがこの自然界の法則(掟)なのであり、これを岐・美二神が分担し持ち分けておられることを『古事記』は語っているのであり、精神的な次元を通して全体を統一的に見るといふ視点が何より大切である。原理的にいうと、死者の世界は「内なる私」の世界であり、生者の世界は「外なる私の世界」であつて、この両者は画然と

分かれていることが意味を持つてゐるのである。(21)

神話伝承ではこの世界は岐・美二神が分担し持ち分けておられることが理解されるが、それでも死者の数よりも生まれて来る者の数が多いと伝えられており、死よりも生に限りない期待が込められ、現世の生成発展を約束づけるものとして語られている。ところが少子化のために、我が国では西暦二千年頃からこの神話伝承の説は逆転してしまい、現実には生まれる者よりも死者の数の方が多くなつてしまつた。

人間の生命に限りある理由について『古事記』にはまた、次のような信仰伝承も残されている。天孫降臨の条で、天津日高日子邇邇藝能命が笠沙の御前で、麗しき美人に出会い、早速結婚の申し込みをした。その美人の名は大山津見神の娘で神阿多都比賣、亦の名を木花之咲久夜毘賣という。この結婚話に大いに喜んだ大山津見神は木花之咲久夜毘賣にその姉である石長比賣を副え、百取の机代の物を持たしめて奉り出した。ところが大山津見神の意に反して、邇邇藝能命はその醜い石長比賣を見畏みて、なんと送り返してしまつたのである。大山津見神はこれを大変恥ぢて申し上げるには、次の通りであつた。

「我が女二たり並べて立奉りし由は、石長比賣を使はさば、天つ神の御子の命は、雪零り風吹くとも、恒に石の如くに、常は堅はに動かず坐さむ。又木花之咲久夜毘賣を使はさば、木の花の栄ゆるが如栄え坐さむと宇氣比弓貢進りき。此くて石長比賣を返さしめて、獨木花之咲久夜毘賣を留めたまひき。故、天つ神の御子の御壽は、木の花の阿摩比能微坐さむ」といひき。故、是を以ちて今に至るまで、天皇命等の御命長くまさざるなり。(22)

大山津見神が神との誓約により折角、天孫の生命を長からしめんと欲したにもかかわらず、天孫はその意に反して、美しいもののみを選び取つてしまつたという訳であり、これによつて天皇命の御命は「長くまさざるなり」という次第に立ち至つた。この点について、上田先生は、

結論的に言へば、これらの神話に一貫した思念は、恐らく、生と死は本来不可分なもの、その神秘(生命の神秘)を取へて侵すことは、慎み忌まねばならぬ、といふことであつたろう。それは、存在への畏敬の情を根本としてゐる、と言つても過言ではないのである。(23)

と述べておられる。

生死観とは、あるいはまた、死生観とは「死を如何に見つめるか」の問題であると共に、それを踏まえて「いかにこの世を生き抜くか」という問題でもあることは言うまでもない。日本人の伝統的な生き方においては、生死は共に神の与えしものであり、現実の此の世の生を充実することの中に、人生の意味を見出す生き方である。私たちはより良い明日を齎すために各自の職分を通じ、全能力を傾けて、いのちの燃焼の最後の一瞬まで積極的に人生を充実しなければならぬ。しかしながら、人は能力にも生命にも限界がある。自己の力で達成できなかった理想は、やがて後につづく者の手に受け継がれて、例え一歩ずつであつても、実現されていくだろう。死してなお、草葉の陰から見守り、精神的な援助を与えようとする。ここに道の連続性、生命の連続性があるのだと上田賢治先生は説くのである。

こうした考え方は倭建命の歌の中にも見ることが出来る。景行天皇の御代、倭建命は君命を帯びて西に熊襲を討ち、続いて休む間もなく、東国を平定された。使命を果たしての帰還の途中、書紀によれば五十葦山に荒ぶる神のある事を聞き、大切な草薙の剣を宮簀媛の家に置いたまま、剣を持たずに近江の膽吹山に出かけたことから病を得、遂には懐かしく麗しい大和の山々を思い浮かべながら薨去されることになる。次に掲げる歌は命が日向にあつて都を憶んでの歌であり、国思歌（書紀では國邦歌）として知られている。

能煩野に到りましし時、國を思ひて歌曰ひたまひしく、

倭は 國のまほろば たたなづく 青垣 山籠れる 倭しうる

はし

とうたひたまひき。又歌曰ひたまひしく、

命の 全けむ人は 晝薦 平群の山の 熊白櫓が葉を
髻華に挿せ その子（24）

倭建命は己が臨終に際して、生命力にあふれた健康な人々よ、平群の山（奈良平野の西側を南北に走る低い山脈）の生命の樹と信じられているくま櫓（葉の広い櫓）の葉を髪飾りにかざして、楽しみ踊り、此の世における生命の限りをどうか味わい充実なさい、と人々の末長き前途を温かく祝福しておられる。ここには、倭建命が死んで後に自分がどんな世界に行く

かなどとは髪の毛ほど案じ煩つてはいないということに留意すべきである。

これは命の薨去に際しての歌であり、「此の時 御病甚急かなりぬ」とある。天皇の命を受けて、長い年月を朝廷にまつるわぬ幾多の者らと勇猛果敢に闘い抜き悉く討ち滅ぼして、疲れ果てたるその身でありながら、此の世に生きる健やかな人々に温かい思いを馳せ、その前途を祝福される倭建命の心境は、それ自体、古代に生きた人の崇高な生死観を感じさせる。後の弟橘媛が倭建命の使命を果たさせるために海に飛び込んで海神の怒りを鎮めようとする際に詠まれた「さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも」という御歌と共に静かに読み味わう時、倭建命と弟橘媛のその愛の深さには深い感動すら覚え、心の底から込み上げて来るものがある。

人は生成化育の産霊の御神業にご奉仕し、この世における神から与えられた生命の年月を、己の為に得る限り心を尽し身を尽して有意義に暮さなければならぬ。古典を見る限り、伊邪那美命でさえ黄泉大神となれながら、『古事記』には出雲の国と伯伎国の境の比婆山にはふりまつると伝えており、『日本書紀』には紀伊国熊野之有馬村に葬まつるとしている。

また、同じく国生みの祖神である伊邪那岐命は『古事記』によれば淡海が多賀に坐すとし、『日本書紀』には日之少宮に留まつたとしながら、他の一書には淡路之州の幽宮に遷御され、寂かに長く隠れましたと記している。

つまり、神話伝承によれば、死後の御霊はこの中津国に留まり得るのであり、また同時多在が可能であるということをも物語っている。他界は決してこの世とまったく隔絶されたところにあるのではなく、現界の延長線上にある世界であるということを神話伝承は語り伝えているのである。

従つて、私たちは死後、決して現世と絶縁されたまったく手の届かない世界に往くのではなく、生の世界・死の世界という次元は異なるものの実は生者と死者はいつも共にあるのであり、お互いに祀り、祀られるという形で生者も死者も実は一つにしっかりと繋がって存在しているのである。

そのようにして、私たちはこの世界の秩序をお互いに保ち合っているものであり、意識するとしなにかかわらず、私たちは根底にこの強い信仰

的信念があつたが故に、例え他界が確定されずとも誰も心乱すことなくこれまで生きて来たのであつた。

神道は何よりも神意を第一とし、神意をおそれ畏み、神に与えられた「現世における人間生活」の充実をこそ人生最高の価値として生きて来たのであり、「お天道様」「お日さま」「お月さま」「世間さま」「御近所さま」「御先祖さま」「御蔭さま」という一つ心で、すべてに生かされ、生きるこの身を感じ感謝で長の歲月、ともに暮らしてきたのである。

三、徳を治世の基準とした天皇

昨年三月一日に発生した東北関東大地震は日本中を震撼させた。そればかりか、恐れられていた未曾有の原発事故までが発生し、そのため広範囲に亘って放射性物質による甚大な汚染被害が生じてしまい、福島の人々は先祖伝来の土地を離れて他所での避難生活を余儀なくされてしまった。科学の発展・文明の進化は人間疎外を限りなく推し進め、人類に幸せをもたらすどころか、この母なる地球を汚染し、生態系をも秩序あらしめるどころか、より一層破壊へと導いているように思われる。科学というものとは人間存在を根底から危うくするものであるという事実を突きつけられ、実存への深い問いかけが求められるに至った。原子炉（圧力釜）の底が抜け落ちてしまい、今、炉心が一体どこにあるかさえ未だに分っていないというのに、政府はその現実を無視して一方的に福島原発事故の終息宣言を出したため、「一体、日本はどうなつてしまったのか」とその危機管理能力の無さが世界の嘲笑を買うことにさえなつてしまったのである。

被災地で黙々と活動する警察や地元消防団員、自衛隊員、ボランティアの人たちのその懸命な姿には大変心打たれるものがあつた。人は皆、繋がりが合い、互いに支え合つて生きているのである。

私たち日本人の生き方の中心には魂のふるさとともいうべき天皇皇后両陛下や御皇室が存在する。震災直後から天皇皇后両陛下は被災者たちのことを大変御心配になられ、一切のご奉務に優先して足繁く被災地に出向かれ、避難所である学校の体育館の床にひざまずき被災者の言葉にひたすら耳を傾けられた。そして被災者たちの手を取り、その一人一人に心のこもつ

たお言葉をおかけになり、御慰めになられたことは誰もが知るところである。仙台市宮城野体育館で主婦の佐藤美紀子さんが被災地から摘んできた黄色い水仙を皇后さまに贈られた時、握手された皇后さまとの真心のこもつた二人のそのやりとりが今も目に浮かぶ。黄色い水仙の花言葉は「愛に応えて」だそうだ。

『日本書紀』や『続日本紀』等の古典をみると、地震を「なみふる」と訓読させているが、「ナ」は土地の意であり、「ナ」は「居」であり場所、あるいはそのものの存在を明らかにする意であり、即ち「なみふる」とはナキが震えることである。大地が振動し揺れ動くことによつて己れが存在を主張する状態がナキフルである。地震被害の文献上の初見は、推古天皇七（五九九）年夏四月の乙未の朔辛酉に「地動りて舎屋悉に破たれぬ。則ち四方に令して、地震の神を祭らしむ」（25）とある。

また、『日本書紀』巻第二九、天武天皇（下）七年一二月の癸丑の朔己卯に、

臘子鳥、天を弊ひて、西南より東北に飛ぶ。

是の月に、筑紫国、大きに地動る。地裂くること廣さ二丈、長さ三千餘丈。百姓の舎屋、村毎に多く仆れ壊れたり。（26）

とあり、また、天武天皇一三年冬一〇月条には次のような記述がある。

壬辰に、人定に逮りて大きに地震る。國擧りて男女叫び唱ひて、不知東西ひぬ。則ち山崩れ河涌く。諸国の郡の官舎、及び百姓の倉屋、寺塔神社、破壊れし類、勝て数ふべからず。是に由りて、人民及び六畜、多に死傷はる。時に伊豫温泉、没れて出でず。土佐國の田苑五十餘萬頃、没れて海となる。古老の曰はく、「是の如く地動ること、未だ曾より有らず」といふ。是の夕に、鳴る聲有りて鼓の如くありて、東方に聞ゆ。人ありて曰はく、「伊豆嶋の西北、二面、自然に増益せること、三百餘丈、更一の嶋と為れり。則ち鼓の音の如くあるは、神の是の嶋を造る響なり」といふ。（27）

天武天皇の一三（六八四）年冬十月条に大地震が起り、伊予温泉では源泉が埋もれて出なくなつたという。また、土佐の国では田畑一千町歩が埋もれて海となつたとあり、古老の話によれば「これほどの地震は未だかつてなかつた」ことであるという。また、伊豆嶋が噴火しそれは鼓の音の

如くであり、「神の是の嶋を造る響なり」と記している。古代には、噴火はまさに神の造化の仕業として解されていたのである。

『統日本紀』文武天皇の大宝元（七〇二）年三月条に「己亥（二六日）、丹波国に地震ふること三日なり」（28）と見え、古伝承ではもともと一つの島であった大島が冠島と杵島の二つになったという。また、『統日本後紀』巻第七、仁明天皇の承和五（八二八）年秋七月条には「乙亥（二〇日）、東方に聲有りて、太鼓を伐つが如し」（29）という記事が見える。上津嶋と呼ばれていた神津島の噴火である。

古代の天皇はご自身に「徳」が備わっているかどうかを絶えず治世の基準としておられた。第十代崇神天皇は「国内に疾疫が流行した」ことを御自らの「徳の至らなさによる」と捉え（『日本書紀』）、また、聖武天皇の先帝元正天皇（御在位七一五～七二四）も、その治世の養老五（七二二）年二月の地震の後、「朕が徳非薄にして、民を導くこと明らかならず」（30）と詔されている。

聖武天皇（七二四～七四九）の御世には地震の記事が特に多くみられるが、天平六（七三四）年夏四月七日戊戌に大地震があり、戊申（二七日）に詔して

地震ふる災は、恐るらくは政事に闕けたること有るに因らむ。凡そ厥の庶の寮、勉めて職を理め、事を理めよ。今より以後、若し改励せずんば、その状跡に随ひて必ず貶黜けむ。（31）

と記されている。また、壬子（廿一日）には、

此日、天地の災、異なる有り。思ふに、朕が撫育の化、汝百姓に於いて闕失する所有らむか。今故に使者を發遣して、その疾苦を問はしむ。朕が意を知るべし」（32）

とあり、聖武天皇が國民のために如何に御心を砕いておられるかが偲ばれる。同年秋七月辛未（一二日）には「頃者、天頻に異を見し、地数振動る。良に朕が訓導の明らかならぬに因りて、民多く罪に入る。責めは予一人に在り。」（33）として、聖武天皇は地震が起こったその原因までも「自分一人の責任である」とご自身を厳しく責めておられる。

『日本三大實録』巻第一六、清和天皇の貞観一一（八六九）年五月二六日条の記事に見える陸奥国大地震は誰もが知る通りであり、ここに改めて

記すこともないであろう。

このように、古代から世々の天皇は地震の発生や、多くの人民が罪を犯すのは全て自分のせいであり、「その責任は朕一人にある」と仰っておられるのである。今日、政治家や企業人、経営者たちにそのつめの垢でも煎じて飲ませるべきではないのか。すべからく人の上に立つ者は皆、百万分の一でもこうした天皇の慈悲慈愛の御言葉とその大御心を深く噛み締め味わうとともに、その精神を見習うべきであろう。

「長」たるものの責務と覚悟

何事も責任回避したがる現代人、そうした時代風潮の中で、これは大いに考え直すべきことではないだろうか。これまで「長」たるものは身内や部下の不始末であつても「己が不徳の致すところ」として責任を取つていたのだが、今日の日本人には処世術のみで帝王学が無く、誰も責任を取らないという体質になつてしまった。いわゆる真のリーダーが不在になつたという訳である。それは今回の原発事故に対して誰も責任を取らないという一事によつても分ることである。アメリカの駐日大使にでさえ「日本には数日間、日本政府がなかった」とまで言わせしめたのである。これだけの深刻な事故を起こしておきながら…である。国家的な危機に際して、いったい誰が責任者なのかさえハッキリさせようとせず、誰かが責任を取つても決断するなどということがないという、実に嘆かわしい国になつてしまったようである。

古典に学ぼうとする心のない現代人には、日本の古典など何の意味もなく、もはや何を言つても無駄である。無知な者たちというのは、何度でも同じ穴に落ちることしか、他に生きる道はないのである。

九州の小大名（秋月藩）に生れた鷹山公が一七歳で何百万両もの大負債を抱えた米沢藩の藩主になる日のこと、彼は次の如き誓文（誓詞）を一生の守護神である春日明神に捧げられた。

- 一、文武の修練は定めにしたが怠りなく励むこと
- 二、民の父母となるを第一の務めとすること
- 三、次の言葉を日夜わすれぬこと

贅沢なければ危険なし

施して浪費するなかれ

四、言行の不一致、賞罰の不正、不実と無礼、を犯さぬようにつとめること

これを今後堅く守ることを約束する。もし怠るときには、ただちに神罰を下し、家運を永代にわたり消失されんことを。以上

上杉弾正大弼だいに

藤原治憲

明和四（一七六七）年八月一日（34）

上杉鷹山公は当時、藩の総力を挙げても僅か五両の金すら工面できないような状態であつた藩の藩主となられ、藩主自ら質素儉約に努め、一六年間「一汁一菜」で通し、徹底した仁政を行い、行・財政改革を断行して、遂には幕府から表彰されるほどの財政豊かな優れた藩に育て上げたという優れた御方であり、のちに会社再建の神様とまでいわれた土光敏夫氏が上杉公を生き方の模範とされぬ筈がなかった。日本の記者団から「最も尊敬する日本人は誰か」と聞かれて、J・F・ケネディもクリントン元アメリカ大統領も、真つ先に上杉鷹山公の名をあげたという話はよく知られているが、鷹山公がなされたごとく己おのれの御祭神にだれもが惚れ惚れとするような誓いを立ててみては如何なものであろうか。

縄文、弥生時代から今日に至るまで日本人が持つていた世界観、日本的な生き方を理解しなければ、日本人の生死観すらも分らない。仏教や儒教が入る以前からわが国にはすでに日本人が生きてきた世界観があつた。西洋哲学流の言い方をすれば、古代から延々と現代まで引き継いで来た、日本社会を貫いて個の主体と社会に対する責務（責任）とを前提とした自由の体制が存在したということである。武士は主体の責任において領土と領民たちの幸せを守り抜いた。常に、下のものの責任はすべて自分が取るという形をとつていたのである。ただ目先の、今の状況をどう乗り越えようかと腐心する官僚心得しか知らぬ現代の政治家や経営者たちとは根本的に異なるのである。

「長に立つ者はどこでも、どの階層であつても責任を取る」という姿勢を持つということであり、こうしたことは自明のものとしてあつた。藩主には藩主の道があり、武士には武士の、農民には農民の、商人には商人の生き方というものがあつた、それぞれに責任に対してどう償いをするかとい

うことを常に真剣に考えていたのだ。これを総称すれば武士道などというよりは日本道とでもいったほうがふさわしいかもしれない。これが今日、崩れてしまつてゐるのだ。これは決して技術ではなく人間の生きる姿勢そのものである。技術ならば直ぐに盗めるが、人間の生き方というものは決して盗めないものである。

四、神道―日本的なるものへの自覚

ユングは集合的無意識といったが、民族の信仰というものは、人が意識するとしなやかにかかわらず、その民族や人間の生き方が持つ一定の価値志向性を有するものであり、故にそれがその人々の日々の生活や言動の一切に現れるものである。ところが誰もそれが宗教であるとか神道であるなどとは少しも思つても感じてもない、つまり、「日本的なるもの」について語る時、「自覚」という言葉はふさわしくないのだ。

例えば、正月に食べるお雑煮が神霊の恩顧を頂戴し身につけるための神との大切な共食儀礼であるなどと言われたら、「エッ」と驚くであろうし、家族皆が仲良く神々にお供えたものをごつた煮で「お雑煮」として戴く時の両端が細く尖つた祝い箸（利休箸）は神と人との絆と先祖と子孫とが、また家族全員が固く一つに結び合い、ますますお互いの絆を深め合うための聖なる箸なのであり、これを以てお雑煮を食するという行為は極めて聖なる神道儀礼であり神事なのだと思つたら、さぞかし仰天するであろう。まして、お年玉はお金とのみ思い込んでゐる今の子供たちに「ハイ、お年玉」といつて御餅を渡したら、その子はきつと顔をしかめ、怒りだして御餅を放り捨ててに違いない。

新年を迎えると世界の何もかもが一新し、心なしか大気までが清冽せいれつで新しい生命に満ち満ちて、厳かな雰囲気に変ずるのは実に不思議としか言えない。誰もがみな、晴れ着を着て近くの神社に詣でて柏手を打ち、新年のお参りをして、家族や身内、近隣の親しい方々と「あけましておめでとー」と口々に新年の喜びを交わし合う。こうした日本人の生きざまは自覚しようにもはつきり自覚出来ない、極めて日本的なものであるといえよう。

樹齢数百年を超えて人の寿命の何倍も成長し続ける樹木は、それは決して単なる「木」ではなく神が宿るもの、或いは神の顕現であり「御神木」であるとして四手を垂れ注連縄を張り巡らして畏敬の念を込めて大切にされて来た。また、東西の相撲力士の最高位に立つ人物・力量共に優れた横綱には化粧回しの上に注連縄を締め、神社での土俵入りが許されている。国技である相撲は室町時代に興行化した、その原点は古表八幡神社の神相撲にも見られる如く神への奉納相撲にあったのだ。

あるいは一粒のコメにも神宿るとして「いただきます」と感謝して戴き、一寸の虫にも五分の魂があるとしてむやみに命あるものを殺さず、つまづく石も縁の端としてそこにあらゆるものとの生命や縁の糸の繋がりを感ぜ取り、使い古しの筆や折れ曲がった和裁針にも感謝の心を忘れず、天満宮に筆の上達と共に感謝と慰霊の祀りを行い、あるいはまた針供養を忘れなかった。「ものみな命あり、塵一つにまで生命が宿っており、日本人にとって単なる「物」というのはなかった。日本語の「もの」は物の怪のものであり、かみ、たま、おなどの言葉と同様、それは霊的はたらきを表す言葉であったのだ。ところが今では「もの」をものと素直に感じ取ることが出来なくなり、ただ単に物としか見れなくなってしまったのである。

上田先生は物について、次のように述べておられる。

記紀の撰上された奈良時代、万葉人が「物」の世界を知らなかったのではない。しかしその時代から今日に至るまで、日本人が自然の中には「いのち」を見てきた事実を、否定することも出来はしない。山や川や海は、人間の生活にとって、その生命の営みを可能にする大きな働きを持つてゐる。そこに、神霊を感じ取って来たのである。従って、「霊」と「物」とを区別することは、極めて難しい。極端に言へば、すべてが霊であり、同時に物でもあるのである。(35)

日本神話によれば、人も国土も共に神の生みの子であり、人は自然と共に感じ、自然の懷に抱かれて心の安らぎを覚えて来たのであり、またそこに聖なるものをまぎまぎと幽観し、畏敬の念さえも抱いて来たのである。

所がいま、その日本的なるものが次第に消え去ろうとしているのだ。そのことは昨年の東北関東大震災や原発事故によって自明である。これまで私たちが先祖伝来、命よりも大切に受け継いできた土や畑、母なる大地、

美しい海、緑なす山河、鎮守の森、草木の一本に到るまでが放射能ですっかり汚染されてしまった。政府は大いに国策を誤ってしまったのだ。日本人の自然観についてこれ以上は述べないが、この大自然は神であったということだけは私たちは知っておかねばならないだろう。

江戸期の神道学者である橋三喜(一六三五〜一七〇三)は「生れ来ぬ先も生れて住る世も死にても神のふところのうち」と詠み、度会神道学者の中西直方(一六三四〜一七〇九)が「日の本に生れ出しに益人は神より出でて神に入るなり」と詠んでおり、また、第八〇代出雲大社國造で、のち出雲大社教の初代管長となった千家尊福公(二八四五〜一九一七)は「幽冥の神の恵しなかりせば靈魂の行方は安くあらめや」と詠んでいる。(36)

死とは悲しく厭うべきことであり、生を受けた人間である以上はいつかは迎えなければならぬ宿命であるが、しかし、肉体の死は必ずしも精神の死を意味しない。此の世における生が大きな神の懷に抱かれて営まれたと同様に、死の問題についても神々に自己を委ね切ってしまう態度がこれらの歌の中には示されている。どの歌も皆、日本人本来の、より狭義に言い換えれば神道における生死観、靈魂の行方というものは即ち、「人間の靈魂は神から授かったものであるからには、死してこの世を去る時には靈魂は当然のことながらその靈魂を授けてくれた親なる神のもとに帰って行くのだ」と言い切っていることが分かる。三首の歌のそれぞれに、彼らの神に対する絶対の信仰を読み取ることが出来る。

日本の神道信仰の根底には切っても切れない神と人との密接な親子の關係性が、また、亡き親・先祖の御霊と子孫との密接な繋がりと交流(祭り)とがその本質として流れており、上田先生は日本人の神祭りや祖霊の御霊祭りについて次のように述べておられる。

日本人の行う神祭り、祖霊の御魂祭りは、共通な信仰心意によって貫かれており、たとえ死者の祭りと雖も、それは「神と共にあることの慶び」なのである。「死」を断絶・無化・終焉、或いはこの世との絶縁と見るのは、神道の信仰ではない、といってよいだろう。(37)

死者の祭りさえも、それは「神と共にあることの慶び」なのであり、「死」をもって終わりとするのは神道の信仰ではないと上田先生はいうのであ

る。また、

御霊は幽世に在り、祭られて現世（顕世）に來臨し、子孫・共同体の
 弥栄を、子孫・共同体の人々と共に、その慶びを分かち合うことが出
 来る。特に共同体全体に大きな幸せをもたらした者たちは、遠つ御祖
 と同様に、共同体によつて社に奉斎され、永くその祭りを受けること
 も約束されているのである。たとえその幸せに遭うことがないとして
 も、自からが家の祖霊一般として、子孫の祀りを受けることに相違は
 ない。正月と盆は、正しくそのような祭りとして成長し、今日に生き
 続けているのである。個人の生命は短い、生きたことの意味は、子
 孫による生命の営みの継承によつて成就される。それが神道における
 祖霊祭祀の、根本精神だと言つてよいだろう。（38）
 と述べておられる。聞くべき意見ではないだろうか。

ここで少しばかり、戦国武将たちの生死観について見てみよう。

・「四九年一酔の夢、一期の榮華は一杯の酒にしかず、柳緑にして花は紅」

上杉謙信（一五三〇～七八）

・「露とおき露と消えゆくわが身かな、浪速のことは夢のまた夢」

豊臣秀吉（一五六〇～九八）

・「人生五〇年、下天の内をくらぶれば、夢の如くなる、一度生を得て滅

せぬ者のあるべきか」織田信長（一五三四～八二）。

信長が出陣に當つて舞つたとされる幸若舞は室町時代に流行した。南北朝
 時代の武将桃井直常の孫、幸若丸直詮が始めたとされる。それぞれの歌に
 戦国武将の覚悟の程が偲ばれる。

「武士道と云は、死ぬ事と見付たり」とは、葉隠れ武士道としてよく知ら
 れているが、徳川時代中期の『常山紀談』（39）には次のような話がある。
 有る武士の主従がともに那須与一の琵琶を聞いた。琵琶を聞いて涙し
 た主君に、臣下の武士が「このような勇壮な話を聞いてなぜ涙するの
 ですか」とただした。質問を受けた武将は、「今までお前たちを頼も
 しい武士と思つていたが、その質問で失望した。与一は、もし扇を射
 そこねたら腹を切る覚悟をしている。与一の心中を思う時、涙しない
 ではおれない」と答えたというのである。覚悟は悲壮なものであり、
 悲壮な覚悟をふまえて立つところに武士の理想がとらえられていた。

（40）

二期の榮華は一杯の酒にしかず」というが、露のごとくはかない生の
 自覚にある戦国武将にとつて、出家心は邪魔でしかなかっただろう。『甲
 陽軍艦』（41）には、武田信玄が『碧嚴録』（42）は読むべきであるが七卷
 までにとどむべく、十卷全部を修めてはならないと教えられたという。『碧
 嚴録』全部を読むと仏教特有の無常観に襲われ、そぞろ出家隠遁の心がお
 こり、いついかなる時にも死を覚悟し、己が露よりも儚い生命を大いなる
 ものの為に投げ出し捨て切つて、一瞬一瞬を真に戦闘家としていきよく
 対処するという、その武士たるの非情の覚悟が鈍るからである。武士には
 武士の道があるのであり、武士たるものは脇指心を須臾も忘れてはならぬ
 というのである。

相良享氏は「武士と死」の項で、『甲陽軍艦』の品第一六にあるこの「脇
 差心」について、「刀を抜く心であり、ひいては死を決して捨身になる心で
 ある」として次のように述べている。

面目をつぶされ存在を否定されたときには、断乎として立ち上がり「勇
 道のきつかけ」をはずさぬのが真の武士であるという主張がある。「脇
 差心」を面目をつぶされたときは間髪を入れず発動して、「きつかけ」
 をはずさぬのが男の道であり武士の道である。（43）

五、神道の生死観—安心なき安心

「古の大御世には、道といふ言挙もさらになかりき」と神道の本質論を
 展開し、道の言挙のないことが日本の自然の姿であると説いたのは国学者
 の本居宣長翁であった。では、神道における「安心」とは一体どのような
 ものなのか。果して何も言つては来なかつたのだろうか。宣長翁はそれに
 対して「世中は、何事もみな神のしわざに候、是第一の安心に候」（44）
 と単刀直入に且つ明快に答えている。

宣長翁は垂加流神道の信仰者から神道における安心—死に対する平静な
 心の持ち方—は如何なるものかと問われて、神道に安心などというものは
 ない。ただ上の掟を守り、人としてのあるべき限りの業をして世を渡れば
 よいのであつて、この他に特に安心などというものはいらぬと答えている

のである。

つまり、神道に「安心」などというものはないのだ。あるいは「安心」などというものは無益の空論であると知ることが、実は「真実の神道の安心」なのであるというのであり、それは天地始まってからの定めであり、神代からの神定めであるという。

『伊勢物語』の最後の段に「昔、男、わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、つひにゆく道とはかねて聞きしかど、きのふ今日とは思はざりしを」とある。『歎異抄』にも「いささか所労のこともあれば、死なんずるやらんとこゝろぼそくおぼゆることも煩惱の所為なり」と人間の煩惱の深さを著者である唯円が告白している。誰にとつても死は悲しいものであった。死を克服して絶対安心の悟りの境地に至る者はごく稀であり、死路に向かい旅立つ者もそれを見送る人も、大抵の者は悲しみを抱きつつ死んで行つたのであり、悲しみの内に送つたのである。

かの仏教の開祖である釈迦牟尼尊も靈魂の存在や死後の世界に関する弟子たちの問いに対しては無益な空論としてこれを避けたように、人間死後のことは実は人智のはかり知るべきことにあらずというのが真実であろう。ところが人情とはいへ、仏教の地獄極楽説や、儒教の「魂氣は天に上る」などといった作り事の方便に惑わされて、「人死て後にはいかなる物ぞ」と神道の安心について誰もが執拗に知りたがる。そこで宣長翁は、「神道に安心といふ事なし」・「人は死候へば、善人も悪人もおしなべて、みなよみの国へ行く事に候」・「世中は、何事もみな神のしわざに候、是第一の安心に候」と説き、「生も死も神のしわざであるからには、何事もただただ神にお任せして安心しておればよいのだ」と諄々と教えてはみるのだが、いかほど説き聞かせてみても、どうもそれでは人は承服しないと見えて、宣長翁は次のように歎いている。

御国にて上古、かゝる儒仏等の如き説をいまだきかぬ以前には、さやうのこざかしき心なき故に、たゞ死ぬればよみの国へ行物とのみ思ひて、かなしむより外の心なく、これを疑ふ人も候はず、理屈を考る人も候はざりしなり、(45)

「問答集」を読むと、その至る所に、すでに宣長翁の在世の当時から、誰もが生来有するやまと心を儒仏等の外来思想にスツカリ汚染されてしま

い、小賢しい人間ばかりになってしまったと嘆く気持ちで随所に現われている。宣長翁は、人が悲しい出来事に遭遇した時にも悲しまず、驚くべきことにも驚かずして、物に動ぜぬを良き事として尊ぶなどといったことは、みな異国風の虚偽であるとし、それは決して真実の人間の性情ではないというのである。とやかくあれこれとさかしらに屁理屈を述べたてる前に、死ぬことを悲しいこと、せんすべなきものとして、どうして素直に受け止められないのか。どうして悟り顔して本心を偽り隠そうとするのか。宣長翁はなによりもこうした有り様を、外来思想にかぶれた、さかしらな漢意として最も忌み嫌い唾棄し、徹底して排した人であった。

宣長翁は「玉勝間」五の巻「業平朝臣のいまはの言の葉」(二八二)において、国学者僧契沖の言葉を引きながら、次のように述べている。

古今集に、やまひして、よわくなりける時よめる、なりひらの朝臣、「つひにゆく道とはかねて聞きしかどきのふけふとは思はざりしを、契沖はいく、これ人のまことの心にて、をしへにもよき歌也、後々の人は、死なんとするきはにいたりて、ことごとしきうたをよみ、あるは道をさとれるよしなどよめる、まことしからずして、いとにくし、たゞなる時こそ、狂言綺語をもまじへめ、いまはとあらんときにだに、心のまことにかへれかし、此朝臣は、一生のまこと、此歌にあらはれ、後の人は、一生の偽りをあらはして死ぬる也といへるは、ほうしのことばにもにず、いといたふとし、やまとだましひなる人は、法師ながら、かくこそ有けれ、から心なる神道者歌學者、まさにかうはいはんや、契沖法師は、よの人にまことを教へ、神道者歌學者は、いつはりぞをしふなる、(46)

宣長翁は契沖の精神にこそ人間の死に臨む真実の心を見たのである。

宣長翁は死を何ら悲しむに値しないもののように理解するのは全て偽りであり、死を悲しいものとしてそのまま素直に受け止めるこそが人間の真のあり方であり、それは聖人であれ凡人であれちつとも変わらぬ人間の素直な心情であるというのである。

仏教者親鸞にとつては死の悲しみは本来消し去られるべきものであるとするのに対して、それら外国の儒佛の説は「みな人智によるおしはかりのみの無益の空論である」と断じ、宣長翁は死の悲しみはもとも何ら消し

去られるべきものではないのである。

「問答録」を見ると、

小手前の安心と申すは無きことに候、其故は、まづ下たる者はたゞ、上より定め給ふ制法のまゝを受て、其如く守り、人のあるべきかぎりのわざをして、世をわたり候より外候はねば、別に安心はすこしもいらぬ事に候、然るに無益の事を色々と心に思ひて、或は此天地の道理はかやうかやうなる物ぞ、人の生るるはかやうかやうの道理ぞ、死ぬればかやうかやうになる物ぞなどと、實はしれぬ事をさまざまに論じて、己がこゝろこゝろにかたよりて安心をたて候は、みな外国の儒仏などのさかしら事にて、畢竟は無益の空論に候、すべてさやうの事はみな、實は人の智を以てはかり知べき事にはあらず候へば、いろいろに申すも、みなおしはかりのみに候、御国の上古の人は、さやうの無益の空論に心を勞し候事は、つゆばかりもなく候ひし也、(中略)一つも古への道にかなへるは候はず、(47)

人は誰でも自分の力のみによつて生きてゐるものと勝手に思い込んでゐるが、実はそれは大きな錯覚であり、私たちは神によつて此の世に生み出され、そして「生かされて生きる」此の身なのである。人は生まれ乍らに神から使命を授かつており、故に誰でも「使命持ち」なのであり、神が与え賜うた天賦の才を發揮してその聖なる使命を達成するには強い信念と情熱、また、不断の努力の積み重ね、研鑽というものが要になつてくる。人としての任務と責任を全うせずしては「お天道様に申し訳が立たぬ」という、日本人の伝統的な生き方はこの世の生を如何に充実するかにあつたのである。

また、人は死してなお、己が家族や子孫、愛する人を草葉の陰から暖かく見守り、守ろうとするところに日本人本来の生き方があり、死を以て親・先祖たちと私たち子孫とが永遠に断絶してしまうなどということはあり得ないのである。年々歳歳の、また、四季折々の年中行事やまつりはそうした神や先祖と私たち子孫との深い絆を再認識し、お互いの交流を深め合う絶好の機会でもあつたのである。うれしい時には手を取り合つて心から喜び笑い、悲しい時には肩を寄せ合つて心底素直に嘆き悲しむ、それで良いのである。

また、生まれ変わりの論について宣長翁は、

神道の此安心は、人は死候へば、善人も悪人もおしなべて、皆よみの国へ行く事に候、善人としてよき所へ生まれ候事はなく候、これ古書の趣にて明らかに候也、(48)

と述べ、人は死後どうなるのかの問いに關しても、宣長翁は「人のほかり知るべき事にあらず」として、次のように述べてゐる。

儒仏等の説は、面白くは候へ共、實には面白きやうに此方より作りて當て候物也、御国にて上古、かゝる儒仏等の如き説をいまだきかぬ以前には、さやうのこざかしき心なき故に、たゞ死ぬればよみの国へ行物とのみ思ひて、かなしむより外の心なく、これを疑ふ人も候はず、理屈を考る人も候はざりし也、さて其よみの国は、きたなくあしき所に候へ共、死ぬれば必ゆかねばならぬ事に候故に、此世に死ぬるほどかなしき事は候はぬ也、然るに儒や仏は、さばかり至てかなしき事を、かなしむまじき事のやうに、いろいろと理屈を申すは、真実の道にあらざる事、明らけし、(49)

こうした宣長翁の思想を単に「あきらめ」の論としか解せないとしたら、宣長翁を、また、もののあはれをまつたく解せぬ者なのであり、人が真に「神のまにまに生きる」ということがどんなに厳しいもので、非常の覚悟が要るかということがまるで分らぬが故である。実はこれこそが真の覚悟とも云えるのであり、「生かされて生きる此の身と知らずやも人」との、宣長翁の声が耳朶に直接聞こえて来るようである。

「鈴屋問答録」を読むと、当時の知識人たちの誰もが天命に安んずるを説き、悟りを説く儒・仏道にかぶれてしまい、また人心荒廃して人々の神への信仰がどんなに衰退し疑い深くなつていたかが容易に想像出来、また、翁がそのことを苦々しく思い、どれほど憤慨していたかということがよく分かる。

宣長翁にとつて「信」とは、心素直に神を信じて一切を神に任せ切ることにあつたのであり、そこには微塵の疑いもなかった。いわゆる人は「神のまにまに」生きればよいのである。天地の間に有りとある事柄は悉く神の御心なのであり、この世の一切は神の為す業であると翁は心底信じ切つていたのである。悲しむべきことを心素直に悲しむことがもののあわれを

知ることであり、まことのみやびは「朝日に匂ふ山ざくら花」の如きものであると詠まれた翁は、なによりも大和心を、純粹無垢な心（真心）をこそ尊ばれた人であった。（50）

相良亨氏はその著『日本人の死生観』の中で、

日本において、死を悲しいものとしてうけとめることこそ人間の真実であるとい切った思想家は、宣長がはじめてではないかと思われる。と述べている。（51）

六、亡き祖父からのメッセージ

筆者には幸智子という四歳年上の姉がいたのだが、早世した。色白で大変利発な女の子であったという。それを深く悲しみ、また自分の至らなさのゆえであると己を責めた母は、いつしか近所の方に勧められるままに高野山・篠栗四国八十八か所にお参りをするようになり、今度は元気な子供が授かりますようにと御大師（真言宗の開祖・弘法大師）さまに願掛けをした。そうして授かったのが筆者という次第である。それで「お大師さまの（授かり）呪」としてことのほか大切に育てられたのだが、何と七歳になった時、原因不明の病氣？ になってしまった。医者も首を傾げるほどでどこにも異常はなく、顔はにこにこ笑っているのにまったく声を発しなくなり、また、両足が立たなくなってしまった。母親は大変驚き、これは御大師さんに願掛けをして願いを叶えて戴きながら「お礼まいり」をしていないからだだと悟り、さっそく御礼参りに行こうとするが、それを父親がどうしても許さない。当時、商売を営んでいた父は、母の手助けなしには自分が大変困ってしまうため、「お礼なら、ここから篠栗の方角を向いて頭を下げて言っておいたら良いのだ」とばかりに母が篠栗四国にお礼参りに行くことを許さなかった。

ある日、思い余った母は父から怒鳴られるのを覚悟の上で「今日は何とでも行く！」と腹を決めたのだという。秋の陽は短い。子供とはいえ、七歳の男の子を背負って、決して強くない小さな細い身体之母が山坂道を徒歩で分け入り、願掛けしたすべての佛さまに心の底から御礼を申し上げ御参りするというのはさぞかし大変だったに違いない。

お山から戻って出て来た時にはあたりはもう真っ暗だった。その母親の苦勞も知らず、筆者は母の背中越しに指差して山道に落ちているドングリを拾ってくれろとせがんだりしたことを今も思い出す。そのたび毎に母はハイハイと喜んで拾ってくれた。日が暮れて、今まで一緒だったご婦人たちの巡礼団とはぐれてしまい、大きな道が二つに分かれて、さて、どちらに進むべきかと迷った時、不思議にも筆者が背中越しに「こっち、こっち」と指差す方向に歩いていくと、さつき見失った団体一行の後姿が遠くに見える……ということが度々あった。

さて、筆者の祖父賢定は福岡県直方市にある真言宗の寺の住職であった。父が残した写真のアルバムをめくると、祖父の写真の下に権大僧正賢定大和尚と書いたメモが貼り付けてあった。今となつてはハッキリとしたことは分からないが、土地をめぐる市との問題が生じて、寺は明治期に天台宗から真言宗に宗派を変えたと聞いている。祖父は平素は大変寡黙な人であったが、説教が上手で、また、真言密教加持に大変優れた僧であった。父に会いにわが家に立ち寄った時、家にあつた大きな黒板に祖父がよく一筆書きで円を描いたり、達磨の絵を描いていたことを今でもよく覚えていた。

僅かに残っている寺の記録では、延暦八年筑紫大宰府坂本の成就院玄清法印六代法孫、願聖法印（筑前三笠郡四王寺住職玄清法印の子孫）が朱雀天皇天曆四年九月、下境村原口に堂宇を新築開基したというのが最も古く、それ以前の事は皆目分らないのである。ご本尊はその頃から十一面観世音菩薩であった。その後、阿闍梨玄流法印（文化十二年十月二十一日寂七九歳）―権大少都門流法印（天保十二年一月十二日寂八七歳）―と続くのだそうだが、この点は不確かである。

渡辺家の近い先祖は国前国造であり、その先祖の内には幾人か國學者が出ており、その内の一人が何らかの事情によつて仏門に入った者がおり、十一面観世音菩薩の堂宇を開基し、それが西教院へと繋がっているのである。遠祖を辿れば第七代孝靈天皇の第二皇子五十狹芹彦命（比古伊佐勢理毗古命、亦の名は吉備津彦命）に繋がるが、これはあくまで血統である。筆者の霊統は出雲の大国主大神と宗像三女神の二柱で沖ノ島に坐す奥津島比賣命（多紀理毗売）との間に誕生された神であり、霊学の師である佐藤

卿彦氏は常々、血統よりもこの靈統の方がはるかに重要なものであると仰っておられた。職業や血統は継げて、この靈統というものは決して継げないものである。

寺に関する遡り得る確かな記録としては、福岡県鞍手郡下境村一四八七番地、権大少都眞學法印（西教院・院主、渡邊眞學、明治十七年十二月八日寂、八十七歳）―権中僧都眞淨（眞學の長男。本名は渡邊眞造、明治四十年旧曆八月十八日寂六十七歳）―渡邊千代松（大正十二年七月一日卒）―権大僧正賢定（明治十一年十一月二十九日生まれで本名は渡邊彌森。この賢定上人の時、天台宗玄清部より高野山眞言宗に改む）。この後、筆者の父義人（明治三十七年十月二日生まれ）が後を継ぐべきであったが父はこれを嫌い、結局、渡邊家からは跡取りを出さなかった。そのため、廃寺をおそれた祖父が高野山より養子を迎え入れ、その人物に渡邊姓を名乗らせ、また、嫁の世話までして今日に及んでいるという次第である。

所が、血とは恐ろしいものである。筆者が大学在学中のある年、妹の高校友人宅に遊びに立ち寄った際の出来事である。そちらの父親は毎年冬には身延山に籠って荒行をするといった、両親ともに熱心な日蓮宗の信仰者であり、山での荒行から下山した後は、奥方を依り代として降霊祈祷をもつて悩める人々の相談事や救済をして生計をたてておられた。

遊びに立ち寄った折、仏前で一緒にお参りしていると、なんとその場に筆者の祖父「賢定」が降りて来たのである。そして、その妹の友人の母親（俗世間という霊能者）が言うには「勝義さん、あなたのおじいちゃんが今出て来て、あなたを佛の道に取ると言うてあるよ！」とのこと。とんでもないことである。他にも兄弟姉妹がいるというのに、なぜ私なのか…。また、渡邊の家はなにも我が家だけではない。自分の人生は「さあ、これからだ」と思っている矢先に、夢も希望も一切捨て去って、若い身空で頭を丸めて坊主になんかなるもんか！とそのとき正直そう思った。祖父は生前に多くの人々をあの世に見送った大僧正なのである。その祖父が引導を渡して来た筈の死者たちがまともな死者になつていない、つまり、まともに死者として生きていないということに祖父賢定は「死んでみて初めて気付いた」のだというのである。さすがに佛の道一筋に生きた祖父であつてみれば、肉体を脱して靈魂のみになつてみて、やつと、靈魂不滅と共に人

間死後の真実、孫（筆者）が生まれ乍らに救済の使命を持った人間であることに気付いたのである。

祖父賢定は「お前の家族はみんな崖っぷちを歩いており、このままでは両親ばかりか、兄も姉も苦勞ばかりで決して幸せにはなれないぞ！」というのである。確かに祖父の御霊が出て来て言つた通り、実際に父も母も兄姉たちも苦勞ばかりでまったく不如意の人生そのものであつた。だが、自分で言うのもおかしいが人一倍、親しい兄弟思いの私であつたものの、家族の幸せのためとはいえ私一人が犠牲にならなければならぬなんて、そんな不公平なことは受け入れられない…と思つた。いくら何が何でも、そんなことは真つ平ごめんだとその時は拒絶したのである。

ところが、結婚して二人目の子供（娘）が授かつた時のこと、妻がともにおなか痛んで苦しむので学生時代に世田谷に住んでいた瓜谷という友人の父親のご配慮で習い覚えた浄靈法（眞光の術）を試したところ、妻の腹痛が癒えたばかりか、妻が畳の上に何やら文字を書くようになったのである。そして、今していることを「どうか実家ですてほしい」と訴えて来たのだ。そこで、背後の見えざる存在の乞うままに家内の実家で浄靈法を行つたところ、出るわ出るわ、死んでも死にきれない者たち、つまり、この世に想いや未練、執着を残して行くべきところへも行けずにもがき苦しんでいる、立派に死者に成り切れていない死者の御霊や、いまだに自分が死んだことさえも知らぬ未成仏の死者の御霊たちが家内の身体を媒介（依り代）として見るも哀れな姿で次々に出現した。筆者は一心に神を祈りながら、それら死んでも死にきれない死者たちに対して、毎夜まるで幼な子に諭すようにして人間生存の意義や人としての本来あるべき道筋を懇々と諭し続けた。神によつて生かされ生きる此の身であることすら知らぬ死者の御霊たちは己の生前の間違つた生き方を深く反省悔悟すると共に、筆者の体から発する神霊の神氣（光）を受けて、これまた次々に救われていったのである。

自分の妻（母親）にも隠して来た、義父本人しか知らない己が父親の死の秘密までが自分の娘の身体を通して白日の下に晒されるに到り、それまでこうしたことをまったく信じなかつた義父までが「この世にそんなことがあるものか！」と驚愕して信じざるを得ない始末。しまいに妻の一家

に祟つていた数百年前の怨霊（黒田藩に仕えていたお女中の他、幾柱かの怨霊たち）までが最後にはその名を明かし、「あなた様のご恩は一生、忘れません」と筆者に厚い感謝の言葉を告げて救われていったのである。こうして、妻の実家の一族が次々に早死したその本当の理由がはつきりと明かされ、積年の怨念がすっかり解消してしまったという次第である。

死者が正しく生きるためには、この世に恨みや妬み、嫉み、無念、残念などといった様々な想いや執着、未練などの、いわゆる私欲・我欲に発する「魄」を少しも残してはならないのである。それらは凡て、この世に生きる私たちに少なからず有形無形に影響を及ぼさずにはおかぬからである。

私たちは亡き人の死を心から悼み感謝報恩のまことを捧げて、決して慰霊供養を怠つてはならぬのであり、死んで後の親孝行を忘れてはならぬのである。思えば思うほど、死者の御霊ほど大事にすべきものはないのだ。

筆者はこうして此の身に起こった二十代の数々の霊的体験を通して、神界や神霊が厳に存すること、神の偉大さ、亡き親・先祖の御霊への感謝報恩の祭りの大切なこと、妖魅邪霊の暗躍、審神者の不可避なること、人間の想いの恐ろしさ、日常の心の持ち方や心の清澄がいかに大切であるかということ、人間死後の世界の存在、先祖と子孫との切っても切れない密接な関係、そしてこの世が誰にとつても人間的成長進化のための修行道場であること、死後の御霊の養生（慰霊安鎮）の大切なこと、真心の祈りは必ずや聞き届けられることなどなど、多くのことを体験させられ、また学ばせられた。今、その当時の出来事を振り返って考えてみても、まったくもつて不思議としかいいようのない、その後の筆者の人生を大きく左右する出来事であったといえる。

この時も「勝義、お前が寺を継いでくれ」と言つて、祖父である賢定和尚の御霊が出て来て幾度か強く乞うたが、まさか今更ご養子ご一家を寺から追い出すなどという、人の道に外れたことは決して出来よう筈もない。祖父には分つてもらつたものの、世のため人のために生きるべく定められて生まれて来た者はその宿命から逃れることはできず、結局は神の道に取られることになった。

人は知らずとも、どんな人でもこの世に生まれ出る時から、その人の一

生というものは神仏によつてきつと定められているのであり、どんなに避けようとしても必ずやらされるものであるということを、こうして筆者は青春時代の数々の貴重な霊的体験と共に身に沁みて思い知つた次第である。死者を成仏させ得ない僧侶たち、神意を問う術を失い、霊魂の穢れすら真に祓い浄め得ない神職たち、悲しいことだがこれが現実なのであり、宗教の世俗化はいまや深刻な問題となつてゐる。

- ・忘るなよ はかなきものは みまかりし み祖の魂の 迷う行方ぞ
 - ・かくり世の さまも見せたや 氏子等よ めぐりめぐれる 罪の有様
 - ・業深き 霊魂の姿 なさけなや 現世の務め 怠りしもの
 - ・此の世にて 修行怠る 霊たち その有様を見せてやりたや
 - ・現し世の 人の助けを 借らずして あの世の御霊 浮かび難きぞ
 - ・死ぬ迄は よしあし事は 分らぬぞ 神のみ国で 初めて判る
 - ・現し世の 人の歎きは いと軽し 御霊の歎きは 底はかられぬ
 - ・疑ふな 病ひでなきぞ 霊魂らが 助かりたさの 願ひ故なり
 - ・寄り集う 霊魂の様を 見せばやな この世の徳の こと思はるる
- （此の世で徳を積まねば霊魂となつて苦しみますぞ）（52）

七、おわりに―死ぬ用意をするな

石ばしる垂水の上のさ蔵の萌え出づる春になりけるかも（万葉集 一四一八）

神生み・国生み神話が語られる記紀・万葉の時代から、私たちは人間も自然も国土も共に神によつて生み出され、神に生かされて生きて来たものであり、従つて自然と共感し、自然と調和した生き方をするることによつて心の安らぎを感じて来たのである。日本人には本来「ヒマラヤを征服する」などといった自然を支配するという西洋一神教的な思想はなかった。

そもそも生と死はまったく「可畏し」としか言いようのないものであり、個々の生命はそれぞれに個々のいのちの顕現であり、譬えようもなくかけがえないものであつて、生も死もまったく神の領域に属する事柄なのであつた。だれもが存在への畏敬の情を根本として地域共同体の中で連帯し、相互扶助し合い、助け合つて生きて来たのであるし、神道は何よりも生命

を畏敬し、生命の源を大切にすることを教えるのである。

誰でも自分だけの力で生きていくのは決してなく、神によって生み出され、いのちの力によって生かされ生きていくのであるから、生かされ生きる身の私たちは生命の神秘というものに對し、それを敢えて侵すようなことは慎み忌まねばならないものと感じてこれまで生きて来た。

共同体のなかで生死を共にして来た人々にとって、個人の生命や個人の死は無かったとさえいえるのである。日本人は自らを神の生みの子であると信じ、あるいは肉体は知らずともその本体たる靈魂は必ずや神や祖先のもとに帰りつくことを知っており、それを疑うことさえなかった。そして四季折々に神や死者の御霊（祖霊）を招き迎え、供物（節供・おせち料理のもと）をもってこれに饗応し、共に交歓し合い、そして送るといった、節目節目に「祀り、祀られる」といった先祖と子孫両者の持ちつ持たれつの密接な関係によって世界が秩序を維持して来た。生死を越えて誰もが神や先祖と共にあることの喜びを心から分かち合って来たのである。

村八分などといった言葉があるが、どんなことがあっても後の二分、即ちその一家に死者が出た時や火が出た時には村人全員が助け合っていたのであり、なによりも個人の死はなかったとしなければならぬ。これまで現存在世界の他に何らかの死後の世界を見るなどといった考えがあまり発展して来なかった理由は、実はこうした点にあつたのではないだろうか。

死後靈魂の行方について強く関心を抱いたのは国学者の平田篤胤たちであつたが、他にも多くいたというわけでは決してなく、それは今日でも同様である。日本人は大自然の懷に抱かれ、神に生かされ生きている今日ただ今、この「今」をいかに充実させて生きるかに邁進してきたものである。

「死の問題」についてこれまでよく説いてきたのは仏教徒たちであつたが、本来無神論・無靈魂説の立場にある筈の者らにしては矛盾も甚だしいのではなかろうか。

このように、本来、人の生命は「個人」としてあり得るのではなく代々の親から引き継がれたものであり、神々の恵みと共同体の力によって支えられてきたものである。神道には絶対の神や全知全能の神は坐さず、この国土と人とは共に神の生みの子として認識されており、人は自然と共感し、自然の懷に抱かれて心の平安を覚えることが出来ることを先祖以来、面々

と伝えて来たものであり、人間の日々の生活を可能にする大きな働きを持つ山や川、海、大地そのものに神靈を感じ取り、畏敬の念すら感じて生きて来たのであつた。

神から実意丁寧の人として絶対の信頼を得ていた金光教の教祖、川手文次郎（金光大神）さんの教えでは「死ぬ用意をするな。生きる用意をせよ。死んだら土になるのみ」（「金光大神理解」七五二（53））として、現に生きている「今月今日」こそが最大の問題であり、多くの人が怖れ思い煩う死は何程の意味も持たなかった。「人間は生き通しが大切じゃ」と金光大神は教えられたのである。信仰生活を日々送ること自体がその信仰のすべてであつたのであり、つまり、「今を生きる」ということに尽きるのである。

最後に上田賢治先生の言葉を以て本論の結びとしよう。

本来、人の生命は、個人としてありうるのではない。代々の親から引継がれたものであり、自然の神々による恵みと、共同体の力によってこそ支へられて来たものである。確かに、死後は完全に我々の知りうる世界ではないが、我々が祀る限り、祖先は我々と共に生き続けて来られた。我々の子孫が、そして我々の共同体が、我々を祀ってくれる限り、我々もまた、彼らと共に生き続ける筈である。そこに生命の永遠性があるのだと。

神道が神祇と祖霊の共同体に依る祭祀を、信仰の中核として立て、来たのも、死を否定的な価値としてではなく、むしろ積極的な生に向けての価値として、捉へて来た事実を物語るものに外ならない。神道の、死に對する想念が、その本質において明るく、かつ淡泊なのは、当然のことだと言つてよいだらう。（54）

【註】

- （1）上田賢治『神道神学論考』、平成三年三月、大明堂、五三頁。
- （2）『同右書』五三頁。
- （3）『同右書』五九頁。
- （4）『同右書』五九頁。
- （5）『同右書』五九頁。
- （6）日本の代表的な仏者たちの生死観について少し見ると、例えば道元

禅師は「修証一等」「行持道環」「生は生に任し、死は死に任す」という態度であり、あるがままの「生」を受け入れ、あるがままの「死」を受け入れた(五四歳)。捨て聖の一遍は「二代の聖教みなつきて南無阿弥陀仏となりはてぬ」眠るがごとき大往生だったという(五一歳)。親鸞「明日ありと思う心の仇桜夜半の嵐の吹かぬものかわ(九〇歳)。日蓮「二日の命は三千界の財にも過ぎて候なり」本行寺・お寄り掛かりの柱の逸話があるごとく、見事な最期だったという(六一歳)。最澄「心形久しく勞して、一生ここに窮まれり」「法、人を弘め、人、法を弘む。道心のなかに衣食あり。衣食の中に道心なし」(五七歳)。

一休「心配無用、何とかなる」(八八歳)。世俗の権威に媚びず、天衣無縫で破天荒な生涯を送った行雲流水の禅僧、一休宗純は応永元年(一三九四)、後小松天皇の御落胤として生れた。幼名を千菊丸という。六歳の時に出家し、決死の覚悟で修行に励んだ一休は遂に大悟徹底するが、その一休禅師も生涯に二度、人生最高の師である謙翁宗為の死後二一歳の時と、大徳寺内の派閥問題が起こった五四歳の時に自殺を図っている。八八歳の一休が森女と数人の弟子たちに看取られながら世を去る前に、「どうにもならない事態に直面したら、これを開いて見よ」とて弟子の一人に手紙を手渡した。のちに弟子がそれを開封してみると、次のようにしたためられていたという。「心配無用、なんとかなる」。

良寛「災難に遭う時には遭えば良い。死ぬ時には死んだら良い。それが災難を逃れる一番の方法だ」(七三歳)。多くの年から「良寛さん」と親しみを込めて呼ばれた江戸中期の曹洞宗の禅僧、越後国出雲崎の名主の長男として生れた良寛禅師は生涯「寺」を持たず、純禅を通した清貧の僧であった。重病の際、人に問われて良寛は「死にたふなし」と答えたという。いかにも人間味ある伝説であるが、彼の辞世は、「散桜残る桜もちる桜」「我ながら嬉しくもあるか弥陀仏の今その国に行くと思へば」である。いよいよ臨終に際して、周囲の者が遺偈(遺言)を乞うと、口を開いて「阿」と一声せしのみで、貞心尼らに看取られながら眠るが如く端然と坐化したまうという。

(7)

その闇維(火葬)の日には、「千有余人來り聚り、齋しく手を擧げて流涕せざるはなきなり」というから、良寛さんが如何に人々に心から慕われ愛されていたかが分かるであろう。晩年の文化一三(一八二八)年に大地震が越後地方を襲い、多くの犠牲者が出た時、良寛は知人に宛てて次のような手紙を書き記した。「災難にあうときは、あえばよい。死ぬときは死ねばよい。それが災難を逃れるいちばんの方法だ」と。

立川昭二『日本人の死生観』筑摩書房、平成一〇年六月、二三二、二三三頁。また、瓜生中『生死』と仏教』佼成出版社、平成一九年三月、及び『禅入門』洋泉社、平成二〇年三月、九二、九四頁、その他を参照。

「神道」の語について

一口に神道と言ってもその包括する内容は多様である。例えば、神道と名のつくものだけざっと挙げてみても皇室神道や民俗神道、国家神道、天台神道・両部神道(両部習合神道)・法華神道・伊勢神道(度会神道)・吉田神道・白川神道(伯家神道)・土御門神道・儒家神道・山王一実神道・吉川神道・垂加神道・出雲神道・物部神道・御流神道・三輪流神道・雲伝神道・復古神道・通俗神道・理学神道・教派神道(神道大教・黒住教・神道修成派・出雲大社教・扶桑教・実行教・神道大成教・神習教・御嶽教・神理教・禊教・金光教・天理教)・学派神道などがある。神道の他にも日本固有の教えを呼称した語としては本教とか、大道、古道、帝道、皇道、神祇道、神皇の道、随神の道、惟神の道など種々なものがある。

「神道」の語のみに着目して中国文献などを見れば、「陰陽不測謂之神」と見え、『易経』の觀の卦の上篆伝には「觀天之神道而四時不忒。聖人以神道説教而天下服矣」とあり、春夏秋冬の四時が順調に行われているところの自然の不思議な道である天之神道をもつて、聖人がその道を教えとして行ったところ、天下が良く治まったというのである。

西暦前二世紀の頃、鬼道(巫道)に老子の玄(道)の哲学と易経の神の哲学とが加わり、神道が成立したのだと言われたのは道教研究

の第一人者である故福永光司先生であった。先生はよく神道について、山東半島の二世紀の神道が五、六世紀に日本の神道となったのだとか、太湖の周辺で句容出身の葛玄が中心となつて神道の理論づけを行い、その時に易経の陰陽消息理論が導入されたのだとか仰つておられたことを思い出す。また、折口信夫のまれびと論などは中国の神仙思想をただ焼き直したただけだと仰つておられた。

また、仏典には織田博士監修の『仏教大辞典』に「六道の中の天道、阿修羅道、鬼道の三を総称して神道という。又神は神魂、有情の精霊なり、其の神霊の道理を神道という。○中略 又神妙の道即ち仏道を称す」とある。つまり、仏教における神道観は仏、菩薩の永劫に対して、有情の精霊であり、何時かは転落する運命にある位の低い神魂だということになる。韓国では墓所に通じる道を神道といったりもする。

仏教公伝以来、本地垂迹説に見られる如く外来宗教である仏教に庇を貸して母屋を取られた感のある神道だが、吉田神道の卜部兼俱は『唯一神道名法要集』において神儒仏三教について述べ、神道こそが根本であつて、儒教は枝葉であり、仏教はその花実であると反本地垂迹説を説いた。

このように多様性を持つ神道は実に奥深く神秘で誰もなかなかその全容を掴み得ず、神道について語ろうとすればするほどに両掌から漏れ落ちて行く水のように神道の本質はこぼれおちてしまう。斯様に、西洋的な学問の枠組みでは捉え難い、まことに多様性を秘めた神道であるが、今日「神道」という言葉で誰もが一番に思い浮かべるのはやはり神社神道や国家神道なのではないだろうか。日本民族固有の信仰形態を表わす「神道」の語は『日本書紀』用明天皇紀に「天皇信仏法尊神道」とあり、また、孝徳天皇紀に「尊仏法軽神道」とあり、これを文献上の初見とする。このように、神道の語は六世紀に百済の聖明王を通して仏教が公に伝来した時、「それとは異なる」ものとして仏法に対してはじめて使われた語であり、古事記には一例も見ないという点は知つておいてもよさそうである。

毎年、正月になると全国各地の神社は参拝者でごった返している

が、日本人にとって、そうした行為が神道であるとか、宗教であるなどと考へてみたことも無く、はたまた神道が宗教であるなどとは誰も感じてもない。そうしたところに神道の本質が見え隠れしている。

日本民族固有の神道は時に「見えない宗教」と言われたりもするが、それは確かに見え難く、世界外存在としての超越神をたて、自然は人間が征服し支配するものとの発想を根本に据えた西洋的な枠組みや学問形式などによつてはともその本質や全貌を捉えることは出来ない。日本の神道の成立は研究者たちによつては縄文・弥生時代頃からといわれているが、いつの間にかこの日本列島に自然発生的に生まれ育ち醸成されてきたもの、建国当時の大部分の人々の中で共有された継承して来た日本人の一定のものの見方や考え方、感じ方、また、生活様式や行動規範であり、いわば日本の歩みそのものともいうことが出来、歴史や伝統工芸、芸能その他にも見ることが可能な、日本文化の根底に脈々として流れて止まぬ日本民族共通の価値志向性でもある。

ところが明治期になつて日本人の神観念は大きな混乱をきたしてしまつた。「かみ」は本来の日本語つまり大和言葉なのであつたが、我が国最古の文献とされる『古事記』や『日本書紀』などの古典が編集される時代になると、漢字の「神」と表記するに至つた。

織田信長などの戦国武将が武勇を競つていた所謂戦国時代にはザビエルらがキリスト教の神を「ゼウス」やイエズスと呼び、また中国語訳で「天主」などと訳していた頃はまだまだ良かったが、不平等条約改正のためとはいえ禁教令がやむなく撤廃され、キリスト教布教が公認された明治以降、西洋の神が記紀等の神道古典と同じく表意文字の「神」と翻訳されたことから、それまで日本人が抱いていた神観念は大きく混乱して「かみ」の本義が全く分からなくなつてしまい、ために信仰上の重大な混乱が生じてしまつた。それが今日までも尾を引いており、まさに誤訳の恐ろしさを示す稀に見る如実な例ということが出来よう。

（8） 牟田耕蔵『御神歌集』（昭和四五年九月、太陽印刷）。

- (9) 上田賢治『神道神学論考』、大明堂、平成三年三月、五三頁。
- (10) 『同右書』五三、六八頁。
- (11) 『同右書』五四頁。
- (12) 『同右書』六七頁。
- (13) 『古事記祝詞』倉野憲司・武田祐吉校注、日本古典文学大系1、岩波書店、昭和五十四年三月、六七頁。
- (14) 『同右書』六七頁。
- (15) 『日本書紀』卷第一、神代上、第五段(本文)、岩波書店、昭和五十四年一〇月、八八頁。
- (16) 『古事記祝詞』(前掲書) 八五頁。
- (17) 上田賢治『神道神学論考』(前掲書) 五五頁。
- (18) 『古事記祝詞』(前掲書) 六七頁。
- (19) 上田賢治『前掲書』五六頁。
- (20) 上田賢治『神道神学』、神社新報社、平成五年四月、一〇九頁。
- (21) 拙著『神道と日本文化』現代図書、平成一八年四月、一三六、一三七頁。
- (22) 『古事記祝詞』(前掲書) 一三一、一三三頁。
- (23) 上田賢治『神道神学』(前掲書)、一〇八頁。
- (24) 『古事記祝詞』(前掲書)、二二二頁。
- (25) 『日本書紀』上(前掲書)、卷第七、景行天皇一七年春三月条、二九二、二九三頁。
- (26) 『日本書紀』下、卷第二十二、日本古典文学大系68、岩波書店、昭和五十五年八月、一七六頁。
- (27) 『同右書』、四三二頁。
- (28) 『同右書』、四六四頁。
- (29) 『続日本紀』新訂増補国史大系、前篇、卷二、吉川弘文館、昭和五十六年四月、一〇頁。
- (30) 『続日本後紀』新訂増補国史大系、卷第七、吉川弘文館、昭和五十五年一月、七七頁。
- (31) 『続日本紀』(前掲書) 卷八、八五頁。
- (32) 『同右書』卷一一、一三三、一三四頁。
- (33) 『同右書』一三四頁。
- (34) 内村鑑三『代表的日本人』岩波文庫、平成一六年二月、五六、五七頁。
- (35) 上田賢治『神道神学』(前掲書)、神社新報社、三三頁。
- (36) 拙著『神道—日本精神文化の根底にあるもの』高宮八幡宮遷宮四〇〇年記念事業奉賛会、海鳥社、平成二二年一月、一二二頁。
- (37) 上田賢治『神道神学論考』(前掲書) 六六頁。
- (38) 上田賢治、『同右書』七八、七九頁。
- (39) 『常山紀談』は江戸中期の随筆。正編二五巻で湯浅常山著。原形は元文四年(一七三九)成立。完成は明和七年(一七七〇)とされ、その後、拾遺四巻と付録一巻が加えられた。戦国時代から江戸初期までの名将・傑物の言行を伝えた史談集である。
- (40) 松村明監修『大辞泉』(小学館、平成一〇年二月) 一三二〇頁。
- (41) 相良 亨『日本人の死生観』ペリカン社、平成五年七月、一一二頁を参照。
- (42) 『甲陽軍艦』は江戸初期の軍学書。二〇巻。武田信玄の臣、高坂昌信の著述というが、小幡景憲おばたかげのり編纂説が有力。信玄を中心とし、甲州武士の事績・心構え・理想を述べたものである。
- (43) 『大辞泉』九二二頁。
- (44) 『碧巖録』は中国の仏教書で一〇巻。宋の圓悟克勤えんごくきん著。一一二五年成立。雪竇重顕せつどうじゅうけんが百則の公案を選んだものに、著者が垂示(序論的批評)・著語(部分的短評)・評唱(全体的評釈)を加えたもの。臨済宗で最も重要な書とされる。仏果圓悟えんご禪師碧巖録。碧巖集。『大辞泉』二二七七頁。
- (45) 相良 亨『近世武士と死』、田村芳朗・源了圓編『日本における生と死の思想—日本人の精神史入門』、有斐閣選書、昭和五十四年九月、一八三、一八四頁。
- (46) 『本居宣長全集』第一巻、「鈴屋答問録」、筑摩書房、昭和五一年九月、五二七頁。
- (47) 『本居宣長全集』第一巻、「答問録』(前掲書)、五二七頁。
- (48) 『同右書』一六九、一七〇頁。

(47) 『同右書』 五二五頁。

(48) 『同右書』 五二六頁。

(49) 『同右書』 五二六～五二七頁。

(50) 『同右書』 五二七頁。

(51) 相良 亨 『日本人の死生観』 (前掲書) 二〇頁。

(52) 牟田耕蔵 『御神歌集』 (前掲書)。

拙著 『日本神道の秘儀』 (名著出版、平成一五年一月) 一九九～五九七頁を参照されたい。

(53) 村上重良 『民衆における生と死の問題―新宗教の生死観』、田村芳朗・源了圓編 『日本における生と死の思想―日本人の精神史入門』 (前掲書) 二七三～二七四頁。

(54) 上田賢治 『神道神学』 (前掲書) 一一〇頁。

〈付記―神の手紙を読む〉

産土神の御神前で他感法 (帰神術) の研修をおえた翌日、平成二三年八月二九日 (月曜日) の午後のことである。私は神前で横になっていた時、いつの間にか眠ってしまったらしい。なんと自宅の屋上に大きなプールが二つもあって、そのプールのどこかが水漏れがしているらしく、私は懸命にその原因を調査していた。次の場面では家の中には幾つも風呂場があつて、それら風呂場はもとより、ありとあらゆるところの水の蛇口から水が激しい勢いで流れ出ており、必死になつて蛇口を閉めながら子供風呂に数人いた顔がおぼろげな子供たちに「早く逃げなさい!」と叫んでいた。家の中はそれはそれはもう大洪水といった有様で、その激しい水流で何もかもが押し流されそうになる、といった大変な水の恐怖に襲われたのである。次の瞬間、私はハッとして目覚め、いま神前で霊覚状態で見せられた教え (神感法) に凍りついていてた。未だ恐怖も冷めやらぬ中、昨夜他感法のお稽古を受け、今頃は博多から新幹線で帰阪途中にある筈の某夫人に「とにかく、水に注意するように」と電話したところ、「今、姫路を通過中」であるとのことであつた。そして、それから一週間後の九月四日、五日になつて、彼女はその神のご警告の意味を驚きと共に知ることになる。台風一二号による記録的な豪雨が紀伊を襲い、そのために甚大な被害を蒙ったこと

をテレビのニュースで見たからである。昨年三月一日の大震災・大津波での悪夢が再び蘇つて来たかの如き感があつた。水の破壊力のそのもの凄さ…。それはそのまま、大自然の「神の怒り」そのものである。今、地球上のあらゆるものが崩壊し始めた。

失意の中で立ち直れずにいた私は、未だに神が人類の罪をお許しになつてはいないということを知つて愕然とした。神への深いお詫びと反省無くして、真の復興など決して有り得ないということを改めて思い知つたのである。

今、自分がこの世にこうして生きているのは一体、誰の御蔭なのか。自分の生命を此の世に生み出し、これまで手塩にかけて育て育んで下さった大恩ある親に対してさえも、不義理ばかりして来たのである。現代日本人はその生き方の中から、「親の面倒を見る」という大切な心を失つてしまつた。親・先祖の御霊を大切にしない者が此の世で「自分たちだけは幸せに笑つて暮らせる」などという事は断じてないということに今の人たちは何故気付かないのだろうか。

神によつて生かされ生きるこの身でありながら、人間は生命の源である聖なるもの (神や親・先祖の御霊・大自然) に対する畏敬の念を喪失し、人主義に墮してすっかり傲慢に成り果ててしまつた。どうにも救いようのない人間たち。神々は人類の愚かさに対して「それでもわからぬか」と強い警告を発し、お気付けをしておられるのだが、それさえも誰一人気付かないとは一体何としたことであらうか。こうした「神の知らせ」 (神からの手紙) はいつでも、またどこの誰にも發送されている筈なのだが、神意を伺い、大自然の兆しを読もうとする心さえも喪失し、すっかり霊性が麻痺した現代人にはまったくそうしたことには少しも気付かないのである。